



2022年（令和4年）

12月号（No. 931）

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

令和4年度年次晩餐会がコロナ禍を経て3年ぶりに開催される……1	
ヒマラヤキャンプ2022隊	
未踏峰ブンギへ3年越しの挑戦……4	
たつぷりと雲を味わった	
「山の天気ライブ授業」……6	
ピオレドール授賞式に参加して……7	
第10回小島島水祭、	
3年ぶりの本格開催……8	
連載■ご当地アルプス登山案内	
23小野アルプス……9	
24加西アルプス……10	
活動報告……12	
山行委員会／科学委員会／緑爽会	
新入会員……13	
支部だより……14	
群馬支部／富山支部	
図書紹介……16	
会務報告……17	
ルーム日誌……18	
会員異動……18	
図書受入報告……18	
INFORMATION……19	
編集後記……19	

▶日本山岳会事務局（含図書室）取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時

令和4年度年次晩餐会が コロナ禍を経て3年ぶりに開催される

12月3日、東京の京王プラザホテルにて、年次晩餐会が開催された。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で3年ぶりの開催だが、全国から344名の会員およびその同伴者が出席した。記念講演会は4部構成で、そのうち3つの海外登山はどれもコロナ禍による中断を経て実施されたもので、「再始動」を実感する内容であった。

■会長挨拶

「120周年記念事業が進行中」

会場には日本全国の名山の名が付けられた59のテーブルが並び、感染対策のためにテーブル上にはアクリル板が立てられていた。

冒頭、古野淳会長より次のような挨拶があった。

「この2年間、全国の登山者や支部の方々は苦難の連続で、大変なご苦労をされてきたのではないかな」

私自身、登山活動を自粛し、オンラインでのやり取りが増え、変わってしまった日常を過ごしてきた。そんななか、今年から各支部の事業が再開され、私もそのいくつかに参加させていただき、支部の方々との交流を通じて救われるような気持ちになった。」

「講演会では、再開された海外登山の報告を聞くことができ、改めて自分の目と耳で海外の山々を体



晩餐会の冒頭、挨拶する古野淳会長

験することが大事なんだと感じた。報告してくれた支部やYOUTH CLUBのメンバーは、ぜひ今回の経験を次の計画へとつなげて、飛躍していってほしい。」

「2025年には創立120周年を迎える。全国山岳古道調査や山

■物故会員への黙祷と 新永年会員の紹介

続いて、この3年間で亡くなった191名の物故会員に黙祷を捧げた。

次に新永年会員が紹介された。令和4年度の新永年会員は39名。そのうち9名の方が晩餐会に出席しており、壇上で永年会員バッジを授与された。また、3年ぶりの開催ということで、昨年度、一昨年度に永年会員になった会員のう



新入会員の皆さんと、代表で挨拶する仲宗根円会員

ち、10名の方が壇上に上がった。代表して挨拶に立ったのは藤井正善会員。「会員として十分な貢献ができないまま過ぎてしまったが、山登りはずっと続けてきた。会員で良かったことは、毎月の会報『山』と年1回の『山岳』が届くこと。この2つが山を続ける原動力になった。今は岩登りなどできなくなってきたものを若い人たちに伝えていきたい。」と語ってくれた。

■秩父宮記念山岳賞は

新宮山彦ぐるーぷが受賞

令和4年度の秩父宮記念山岳賞は、38年間という長きにわたって

大峰南奥駈道の再興と維持管理に携わってきた、新宮山彦ぐるーぷが受賞した。壇上には同会の4名の方が上がり、表彰の楯と副賞が授与された。同会代表の沖崎吉信氏は、本会の会員でもあり、挨拶の中で「38年間の活動を評価していただき、栄えある秩父宮記念山岳賞をいただいたことを励みとして、今後も地道に活動をしていきたい。」と語った。

■28名の新入会員が壇上に

令和2〜4年度の3年間で、正会員403名、準会員192名、合計595名を新入会員として迎えた。壇上には令和4年度の新入会員で、晩餐会に出席した28名が上がり、代表として仲宗根円会員が挨拶に立った。「私は沖縄県出身で、沖縄は来年、山の日全国大会の開催地に選ばれている。沖縄県の最高峰は於茂登岳で標高は526mしかないが、山の数は大阪、茨城、千葉、佐賀よりも多い。ぜひ沖縄の山に登りに来てほしい。」と抱負を語った。

■重廣恒夫会員よりGHTの報告

続いて、重廣恒夫会員より創立

120周年記念事業である「グレート・ヒマラヤ・トラバース」について報告があった。1回目の踏査は20年春に実施されたが、20年秋、21年春・秋の踏査はコロナ禍で中止に。さらに世界的な物価の高騰や急激な円安の影響を受けて、今年の踏査の実施も危ぶまれたが、「会員の皆様からの支援によって、なんとか実施できた」と重廣会員。10〜11月に行なわれた2回目の踏査では、オランチュンゴラからリンバサンバ山群を越えてマカル・エリアに入り、その後、3コルを越えてチュクンまで下るという行程だった。

＊

晩餐会に移り、乾杯の挨拶は前会長である小林政志会員。「新型コロナウイルスの影響は、当初は1年ほどで収まるだろうと思っていたが、今も第8波が来つつある。声高らかに乾杯したいところだが、まだまだ油断はできないため、静かに乾杯をしたい」と語り、乾杯の音頭を取った。

その後はテーブルごとに会員同士の交歓を行ない、料理とお酒を堪能した。会の終わりにには33支部の紹介があり、盛況のうちに閉会



小林政志前会長の乾杯の音頭で晩餐会がスタート

■本年は記念講演会のみ実施

晩餐会に先立って記念講演会が実施された。なお、例年実施されている特別展示や図書交換会は、感染防止対策などの事情から本年度は見送られた。

【記念講演会】

海外登山助成登山隊報告

「6000m級の未踏ラインとフアスト・マウンテニアリング」

山田利行会員

ともにカナダ在住でガイド業に従事している山田利行会員と谷剛士会員。ヒマラヤの未踏のライン



ヒマラヤキャンプの3隊員が講演会で報告

を目指し、当初はカンチュンナツプ北壁を狙うが氷がつかずおらず、北西壁に転進して初登攀に成功した。

その後、山田会員は秋にBCから無酸素ワンデーでのマナスル登頂を目指すものの天候に恵まれず、C3上部で引き返しとなる。カトマンズに戻った後、急遽、登山許可を取得してアマ・ダブラムへ。BC→山頂間の往復を9時間32分という世界最速タイムで成し遂げた。こうした登山スタイルを山田会員は「ファスト・マウンテナリング」と呼んでいる。また、特定のルートの最速タイムをウェブサイトで競うことを「FKT

(Fastest Known Time)」といい、マナスルとアマ・ダブラムはFKTへのチャレンジだった。

「未踏ルートでの冒険的な挑戦とスピードで自身の限界に迫る肉体的な挑戦。どちらも日本山岳会が標榜するパイオニアワークの実践ができたのではないかと思う。」と山田会員は語ってくれた。

海外登山助成登山隊報告

「若者たちへ受け継ぐヒマラヤ登山」 広島支部アマ・ダブラム隊

数年前、海外登山の経験が豊富な吉村千春副支部長が若手をニュージーランドのマウント・クックに誘い、20年春に登山を計画していたが、新型コロナウイルスの世界的流行に伴って中止を余儀なくされてしまった。その後、広島支部25周年に合わせて、ベテランと若手のチームでアマ・ダブラムにチャレンジすることが決まった。

メジャーな山域・ピークゆえの過度な商業化や、自分たちの思い通りにならない行程に戸惑いながらも登山活動を進め、大田、大野、原の3会員が現地スタッフとともに山頂へアタック。原は登頂に成功したものの、大野が高山病で

ほとんど動けない状態となり、大田が付き添って下山した。全体を通して「反省の多い登山だった」と大田会員は振り返るが、「その反省を次の海外登山の糧にしていきたい。」と語ってくれた。

創立120周年記念事業「ヒマラヤキャンプ」

「未踏峰ブンギへ実践を通してわかったこと」 後藤希介会員、加々見太地会員、安達正貴会員

「ヒマラヤキャンプ」は、ヒマラヤに憧れる若者たちに高所登山の経験を積ませる場所をつくらうと、花谷泰広会員が2015年に立ち上げたプロジェクト。4回目の19年から本会の創立120周年記念事業となったが、出発直前にコロナ禍で中止に。その後、様々な課題に直面しながらも、今秋、活動を再開させて、19年のときに目標と定めていたペリ・ヒマールの未踏峰・ブンギ(6524m)に3名の会員が挑戦した。

結果は、想定外のラッセルや高山病などに苦しめられ、南峰直下6150m地点で撤退となったが、「自分たちしかない静かな山で、自分たちで考え、行動できたこと

はかけがえのない時間だった。」と後藤会員。3人とも「必ずまたヒマラヤに挑戦したい。」と語り、今後への意欲を見せてくれた。

秩父宮記念山岳受賞記念講演 大峰南奥駈道での「千日刈峰行」とその展開」 沖崎吉信会員(新宮山彦ぐるーぷ代表)

吉野と熊野を結ぶ修験の道・大峰奥駈道。その南側約45kmは120年もの間、ヤブに埋もれていたが、昭和59(1984)年から新宮山彦ぐるーぷが「千日刈峰行」と銘打って再興に着手。15年間、延べ日数764日に及んだ第1次、第3次の刈り拓きや、行仙宿の新築、平治宿の建て替えといった4ヶ所9棟の小屋・お堂・祠の整備など、32年間を要して大峰南奥駈道の環境整備を実施してきた。現在はその維持管理を主な活動として、会員の減少・高齢化や、利便性と大峰本来の姿のバランスをどう取っていくかなど課題も多いが、「これからも積善陰徳を旨として、南大峰の黒子として地道に活動をしていきたい。」と今後の展望について語ってくれた。

(文：谷山宏典、写真：奥田有恒)

REPORT

ヒマラヤキャンプ2022隊
未踏峰・ブンギへ3年越しの挑戦

3人だけの未踏峰登山

今回の遠征の話をどこから始め

たらいいのか、正直よく分からない。なぜなら、この遠征は2019年より計画されていたが、新型コロナウイルスの世界的流行により延期を余儀なくされ、3年の歳月を経てようやく実行に漕ぎ着けたからだ。ネパール政府が公開している未踏峰リストを洗い出し、ペリ・ヒマールのブンギ（6524m）を目標に定めたのが19年の年末だった。出発直前の20年3月、ウイルスの蔓延と並行して厳しくなる渡航条件に振り回され、ばたばたと準備をしていた最中、ついにビザが停止されてしまい、虚脱感を味わったのがもはや懐かしい。

しばらく休止状態にあったヒマラヤキャンプが、本格的に活動を再開したのが22年の年始であった。当初6人いたメンバーから参加できたのは僕と後藤のみで、そこに後藤と同じアウトドア・メーカーに勤めていた安達を新たに加えた

加々見太地

3人のチームで、改めてブンギを目指すことになった。

「今年の秋に行くなら、スケジュール的に俺は登れない。」プロジェクト・リーダーである花谷泰広さんからは事前にそう聞いていた。高所や海外遠征の経験が乏しい僕たちにとって、経験豊富な花谷さんの不在がもたらす影響は大きい。これは逆にチャンスだと捉えた。山行をともしることを得られるものは多々あれど、自分たちの力で挑戦することに、さらなる意義があると思った。こうして3人だけの未踏峰登山が、始まるうとしていた。

カトマンズ入りからキャラバン

9月28日、カトマンズに到着。先に渡航していた花谷さんと合流して、遠征の準備を進めつつ、カトマンズの雑踏を楽しんだ。

10月2日、花谷さんに見送られキャラバンをスタート。2日間の車移動で、ベシサハールを経てコ

トへ。眼前にアンナプルナがそびえ、いよいよヒマラヤの麓にきたことを実感した。メタで大雨に降られ3日間の停滞、周囲の山々が一気に白くなった。

このあたりから、メンバーに不調が出始めた。メタでは後藤が高度の影響か少し体調を崩し、最後の村プーガオンからBCの偵察に行くときには、安達が高度障害により途中で引き返した。ブンギへと続く谷の入り口にBCを構えることにして、10月11日にBC入りした。この日まで雪が降り続いていて、いまだにブンギの姿は見えていなかった。

少しずつブンギに迫る

ぐつと冷え込んだ翌朝、テントから這い出ると、北東の空にブンギの姿を初めて認めた。事前にGoogle Earthで見ていた、ずんぐりとした印象とは異なり、ギャップをはらんだ細く長い稜線が延びていて、緊張感を覚える山容であった。

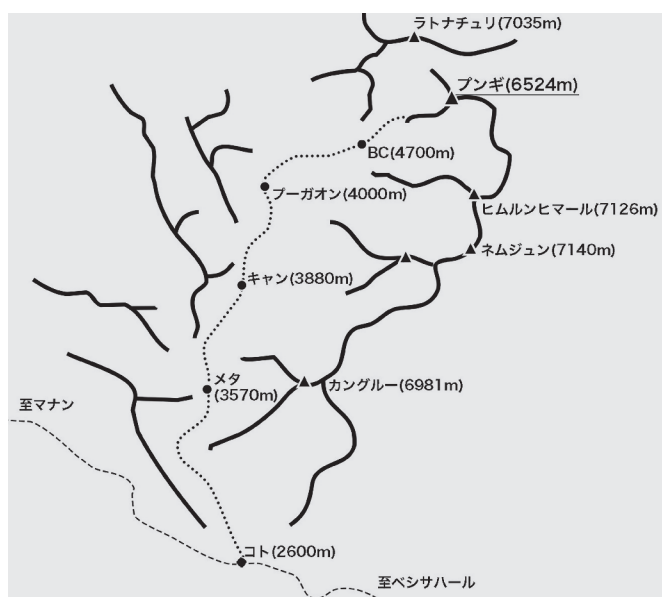
計画当初、すでに歩かれているラトナチュリの麓の水河を回り、北の尾根から登る想定もしていたが、その先の北峰直下が急峻で、そ



最高到達点6150m付近から仰ぎ見たブンギ(撮影=加々見)

の選択肢はすぐになくなった。南峰から西に延びる尾根に取り付くこととし、まずその尾根の取付に1つ目のキャンプ(Advance Base Camp)を、尾根上5500m地点のコルに次のキャンプ(High Camp)の設置を、ひとまずの目標とした。

10月13日、ABC偵察。後藤は体調が優れず、2人での偵察となる。西尾根の取付に向けて谷を遡行していくが、兩岸がもろく、ときおり落石が発生し、肝を冷やした。ゴロと積雪で歩きにくく、アップダウンを繰り返す、消耗の激しい道程だった。安達が頭痛を訴えペースが落ちる。尾根の末端を



過ぎて5000mを越えた所で、広大な平地が現われた。これ以上ない適地だと判断し、少しの荷物をデポしてBCに戻った。

翌日には後藤も復活、3人で荷上げをしてABCを設営し、1泊した。安達はなかなか順応が進まず、頭痛に苦しんでいる。明くる日、HC予定地へ偵察に行くが、数日前までの大雪のお陰で、ひたすらラッセルを強いられた。雪崩のリスクがあり、長居は危険と判断し、5400m地点までトレース

を付けた後にBCまで一気に下った。BCでレストしつつサミット・プッシュまでの作戦を3人で検討したが、各キャンプ間の登降は消耗が激しかったので、往復する回数を少なくすべきだと思い、この後はワンプッシュで山頂を目指すこととした。

サミット・プッシュ

食料や燃料でかさんだ30kg近い荷を背負っていたが、順調にABCまでたどり着く。1日のレストを挟み、HCへさらなる荷上げを行なう。ここでもやはり後藤と安達のペースが上がらない。安達はまたしても頭痛を訴える。5500mのコルは平坦で、安全な幕営適地であった。その先の登路も想定よりも緩やかで、頂上稜線までは難しくないラインでつながっているように見え、登頂の可

能性が十分にあるように思えた。

10月22日、上部ルート偵察。5800mを越えた所で安達が頭痛のためダウン。そこに登攀具をデポし、僕と後藤で6000mまでトレースを付け、HCに帰着した。明らかに安達の順応が進んでいなかった。協議の上、安達にはHCにステイしてもらい、サミット・プッシュは僕と後藤のみで行くことに。苦しい決断だったが、力量もない僕たちは、リスクを最小限に留めなければならなかった。

10月24日、午前2時に起床しHCを発つ。最大限の防寒対策をして歩き出す。夜明けとともに風が強まり、周囲が明るくなつてからも、西尾根には一向に日が当たらず、本当に寒かった。デポ地点から後藤のペースが落ちる。体が熱を作り出せないようで、足先に凍傷の気もあるようだ。6000mまで来ると、その遅れは顕著となる。南峰直下の雪壁を胸までのラッセルをしながら、後藤がついてくることを祈っていた。しかし、力のない笛の音が聞こえて、試合終了となった。最終到達点は6150mほどだったか。南峰は目前だったが、その先の稜線は長く、プ

ンギの山頂はまだまだ遠かった。

登山を振り返って

チームとしての高度順応が上手くいかなかったことが敗因だった。6000mにタッチした後に、再度BCまで下がつてローテーションを組み直すべきだったかもしれないし、上部にもう1つキャンプを設けて、細かく刻んでいく必要があったかもしれない。大雨での停滞もあり、日程の余裕もなく、焦りもあった。その策略を練るには、僕たちは体力も胆力も、経験も足りていなかった。

しかし、自分たちの判断でもって道を拓き、キャンプを設置し、未踏の稜線を歩いたことは、紛れもないリアルな経験として、体に刻まれた。そこから見た景色も、その先にあり得たかもしれない登頂の可能性を想像することも、実践するまで分からないことだらけであった。登頂の成果は得られなかったが、実際に行ってみることで得たものは、たくさんあった。この経験を活かして、またいつか海外の大きな山へ行ってみたい。(この登山は、創立120周年記念事業の一環として実施されました。)

REPORT

たつぷりと雲を味わった「山の天気ライブ授業」

埼玉支部 小玉和孝

埼玉支部では、本会創立120周年記念事業の一環として、猪熊隆之氏による「山の天気ライブ授業」を10月19日に大宮ソニックシティで座学を、20日に芦ヶ久保の丸山で実地講習を行いました。

山の天気予報を謳っていないながら、実は山麓の予報のサイトもあるのに注意が必要とのこと。さらに白馬岳を例に挙げると、大雪渓では大雨のときに、白馬大池を通る尾根筋ルートでは強風によるリスクが高く、リスクの違いを考えない

れば気象遭難を防げない、と話してくれました。

登山者にとって天気図を見るときに最も大切な基本は、等圧線の間隔が狭いと強風が吹き、間隔が広いと風が弱いということです。

例として、北海道から九州で等圧線が5本以上、または本州で4本以上のときで15m/秒の風が吹き、北海道から九州で9本以上、または本州で7本以上のとき、山では25m/秒以上の暴風雨になると言います。

このようなとき、低体温症による気象遭難が起きやすいのです。さらに午前中まずまずの天気なのに、午後、悪天になると増える傾向があります。対策としては、ヤマテンなどの専門的な天気図を見て行動を変更するのが良いが、天気図を見るのに慣れる必要があります。

低体温症は深部体温が35℃以下に低下した状態で、①15m/秒以上の強風②雨や雪などによる濡れ③10℃以下の気温などによって起



様々な雲が観察できた丸山展望台でのライブ授業

きるのですが、太平洋側より日本海側の山の方が、これらの条件がそろいやすいそうです。日本海側の山では、低気圧が発達しながら日本列島を通過したのち、平地の予報は回復傾向でも、低気圧通過後の日本海からの風や前線通過後の疑似好天に注意が必要です。

さて、悪天の基は海から来る水蒸気であり、山にぶつかると上昇して雲（水滴）に変わるの、海と山脈の位置関係に注目するように強調していました。どういうことかというと、日本海からの風が吹く（特に冬）ときは剣岳や白馬岳が大雪になるが、海から離れるにつれて水蒸気が減っていき、悪天候になりにくくなります。2012年5月の連休、白馬岳の三国境付近の稜線で強風のため急速に低体温症となり、ザックからダウンジャケットを出すこともできず大量遭難になりましたが、海から離れた穂高・涸沢では大したことはなかったのです。

逆に南岸低気圧が来るときは、普段雪の少ない関東地方の山でも大雪になることがあります。関東地方では北と西を山に囲まれているので、北や西から風が吹くと湿

った空気が山に遮られるので天気が良くなり、東や南から風が吹くと天気が崩れます。風向きに注目する必要があると感じました。

気象遭難を防ぐためには、なんとなく前進するのはやめてほしい、とのこと。森林限界や尾根主稜線に出る所など急に風が強くなる場所、エスケープ・ルートとの分岐、山小屋や避難小屋、テントサイトなどの引き返しポイントを事前に設定し、少しでも気象遭難をなくしたいという、猪熊さんの熱い気持ちが強くと感じられた講演でした。

20日のライブ授業は、晴れていれば白い谷川岳が見えるはずの丸山で行ないました。残念ながら？多種類の雲（雲の種類は10種類しかない）が見られ、危険な雷を引き起こす積乱雲（入道雲）や雨を降らす乱層雲（雨雲）も出て、レースのカーテンのように見える雨の降る様子も観察できました。

丸山の展望台で約4時間過ごすなかで、太平洋からの水蒸気による雲の流れの変化や、隣の堂平山の天体ドームや秩父の市街地が見えてきたり、楽しい懇談の時間を過ごせました。

REPORT

ピオレドール授賞式に参加して

国際委員会委員長 和田 薫

昨年、山野井泰史氏の「ピオレドール生涯功労賞」受賞に伴い式に参加したご縁で、今年も11月18日から20日にかけて、フランスのブリアンソンで行なわれた授賞式に出席した。

今年の生涯功労賞は、スロベニアのシルヴォ・カロに贈られた。パタゴニアを中心に新ルートを開拓し、ヒマラヤ登山からスピーディなクライミングも行なうなど、そのスタイルは幅広い。

一方で、欧州では著名なものの、



審査員特別賞のトロフィーを手にしたウクライナ人受賞者たち

その存在は日本はじめ多くの国ではあまり知られていなかった。山野井氏が、昨年の受賞をきっかけに海外でもその名を広く知られることになったように、ピオレドールは国境を超えて、偉大なクライマーの存在や功績を知る機会にもなる。単なるクライミングの賞ではないのだ。シルヴォは現在62歳で、クライミングを続けながら母国の山岳映画祭を主催し、若い世代とも積極的に交流している。

受賞登攀の1つ目は、ジョージア人3名によるヒンドウ・クシユのサラグラール(7340m)北西壁初登攀。ちょうどタリバンがカブールを奪還し、サラグラールの近くまで勢力を伸ばすなか、アフガニスタン国境近くでパキスタン政府の登山許可証を辛抱強く待った末の初登頂だった。コーカサス山脈を擁するジョージアはウシュバなどの名山で知られるが、同国出身者の受賞は今回が初めて。

2つ目は、ベルギー人ショーン・ビジャヌエバによるフィッツ・ロ

イ山脈のほぼ全部の単独縦走(10日間で水平距離5km、垂直距離は合計4000m)。縦走開始後早々にロープが切れるなど、危機的とも思えるトラブルに見舞われたが、持ち前の明るさのお陰か、悲壮感なくやりきった。

審査員特別賞には、昨今のクライミング界で最大の話題でもあるウクライナ人3名によるアンナプルナⅢ峰南東稜初登攀が選ばれた。なぜ「特別賞」なのかといえは、彼らはベースキャンプへの往復にヘリコプター使用したためだ。アンナプルナⅢ峰南東稜という難易度の高いルートを、食料や装備を切り詰め軽量化を極めたアルパイン・スタイルのお手本のような方法で、18日間にわたって粘り強く成し遂げた彼らの初登攀は、間違いなく偉業である。しかし、ヘリを使用したことが、アルパイン・スタイルの登攀を表彰するピオレドールにはそぐわないという理由で、今回は「審査員特別賞」にとどまった。彼らが帰りにヘリの出動を要請したのは、下山ルートの変更などでやむを得なかったとしても、行きは使用しないことも可能だったのでは、という声が出ていた。

これについて、メンバーの1人ミハイル・フォーミンは、「会社員で家族もいる以上、遠征に取れる時間は1ヶ月がせいぜいだ。歩いて入っていたら合計2、3ヶ月必要だったろう」と話し、「自分たちの納得がいく登攀ができたから、ヘリ使用について(いろいろな意見があるのは承知しているが)批判は気にしていない」とコメントした。ジャーナリストの1人が「彼らの登攀は見事なものだった。ピオレドールの対象範囲は狭過ぎる」と、特別賞にとどまったことに納得がいかない様子だったように、関係者の意見は分かれた。

さて、彼らに「困難の連続で厳しい登攀だったと思うが、撤退しようとは思わなかったか」と尋ねたところ、「心の中では毎日思っていたよ。でも、3人の会話には出てこなかった。いつも前向きな気持ちだった。」と清々しい笑顔で答えてくれた。

授賞式翌日には、近くの岩場にクライミングに出かけたり、最終日のパーティでは皆で飲んで踊ってと、約15ヶ国からやって来た仲間たちと議論を交わし、楽しく有意義な時間を過ごした。

REPORT

第10回小島烏水祭、3年ぶりの本格開催

四国支部長 尾野益大

第10回小島烏水祭が11月19日、香川県高松市の峰山公園であり、主催者の古野淳会長や来賓、主催者の四国支部会員ら約70人が出席した。半世紀ぶりに四国を訪れたという古野会長は、マイクを握ると「記念すべき10回の節目と、コロナ後3年ぶりに本格的に再開した

ことを祝いたい」と挨拶。続けて「平均寿命100歳時代が間もなく到来する。烏水らが築いた日本山岳会の会員は、登山を通して100歳まで健康な肉体と精神を手に入れ、山に登り続けましょう」と呼び掛けた。



3年ぶりの峰山公園での碑前祭の後、記念写真に収まる参列者一同

この日、9回目の烏水祭出席となる尾上昇23代会長も元氣な姿を見せ、烏水の孫3人、曾孫^{ひまご}2人と親族ら計10人が訪れたことを喜んで「錦上に花を添えていただきたい」と賛辞を送り「烏水祭は高松の峰山公園が全国で唯一。四国支部の名物、風物詩にしてください」と激励した。

7月に、烏水研究の第一人者で烏水祭の支援者だった近藤信行さんが逝去されたため、妻の緑さんが東京から駆け付け、四国支部の会員と久しぶりに旧交

を温め、烏水のレリーフが埋まる顕彰碑や3周年の際に植樹したシヤクナゲを懐かしんだ。

尾野が10周年の記念冊子について簡単に内容の趣旨説明をした後、献花を実施。今回は山陰・広島・四国の3支部交流会も兼ねていて、白根一、森戸隆男両支部長を含む大勢がカーネーションを碑前に手向けた。近藤緑さんがお礼の言葉として、烏水の山行記を巡る信行さんと山岳図書の愛好家・織内信彦さんとの思い出を語った。恒例の吟詠では、烏水の孫の小島誠会員が碑に刻まれた烏水の作品の一節を披露。独特の抑揚のある声音が一带に響き渡ると、参加者の視線は小島さんに集中した。

「花樹海」での夕食懇親会には46人が出席。坂井広志副会長が本部で立ち上げた山岳祭PJについて触れ、烏水ら先人の顕彰の大切さを訴えた。続く神崎忠男元副会長の講演「近代登山の先人たち」では、神崎さんは「日本山岳会は、日本山岳会より48年前にできた英国山岳会をお手本に創立した。ウォルター・ウェストンも会員だった。英国は12人で始め、日本は烏水ら7人が発起人だった」と述べた後、自

身が国内外で交流した著名な登山家や70年、80年のエベレスト登山隊、北極圏遠征にまつわる悲喜交々の話題を紹介した。最後に人生と健康に関する持論を展開。「登山者として自然を、仲間を、命を大切にしよう。精神力が生きる力を下回ればボケが来る。強く生きようと考えず、弱い生き方をしないように」と締めくくった。夜景をガラス越しに眺めての食事と歓談の中、8台のテーブルはどこも話に花が咲いていた。

翌日は高松東部の観光地、屋島に半日のハイキング。瀬戸内海を望む北嶺に行った後、南嶺の屋島城を散策。屋島城は『日本書紀』にも登場するとあって、参加者は石垣などを熱心に見て回った。屋島は高頭仁兵衛が著わした『日本山嶽志』に掲載されているが、当初はなく、烏水が原稿を書いて立項。高松生まれの烏水の愛着かと感じられる。

初日の碑前祭が始まる前には、高松の支部会員らが讃岐うどんの接待を行ない、参加者は本場の讃岐うどんを堪能。屋島からの下山後は、麓の名店「わら家」で舌鼓を打った。

連載■で当地アルプス登山案内23 小野アルプス

関西支部 豊田哲也



小野アルプスを目指し、小野町駅から南西に向かって歩き始める

昔から算盤^{そろばん}の産地として有名な東播磨の小野市は、兵庫県中南部に位置し、神戸市と姫路市の間にある。その小野市の西部、福岡峠から「白雲谷温泉ゆぴか」まで東西に連なる山並みを総称して「小野アルプス」と言う。「日本一低いアルプス」と称され、標高100〜200mの低山が連なっている。

登山適期だが、低山のため夏場は暑いので避けた方が良好だろう。行程中、水場はない。

「コースガイド」

ここでは全行程15・1km、コースタイム約5時間の、福岡峠からの全山縦走路を紹介する。最後に温泉に浸かるならこのコースがお勧めだ。ただし、岩場に不慣れな方は、紅山東面の岩場が上りとなる逆コース（ゆぴかから入山）の方が良いだろう。

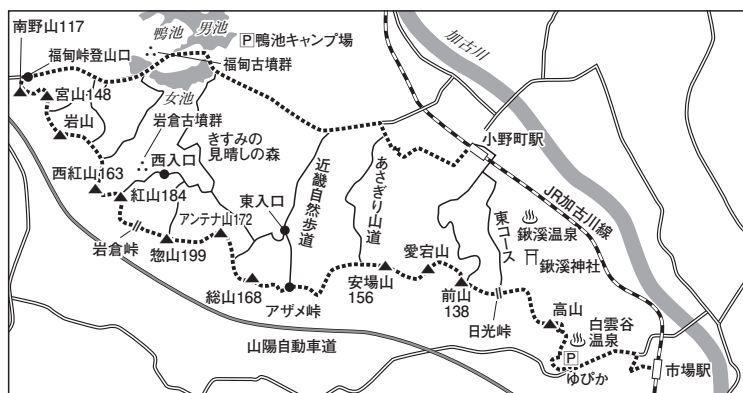
低い山々ではあるが、全山縦走は13のピークを上り下りするので、結構くたびれる。途中で疲れたら、小野町駅側へ下るエスケープ・ルートが多数ある。小野アルプス全体を西コース（福岡峠〜紅山）、紅山コース（鴨池〜紅山）、中コース（岩倉峠〜アザメ峠）、東コース（アザメ峠〜ゆぴか）と登山コースを分けることもできる。

JR加古川線小野町駅下車、南西方向に橋を渡り、県道118号を鴨池方面へ進む。女池の手前で左手に「紅山」と記された岩倉峠への道標が見える。紅山コースの入り口だ。福岡峠へは直進する。左に見えてきた女池は、コハクチョ

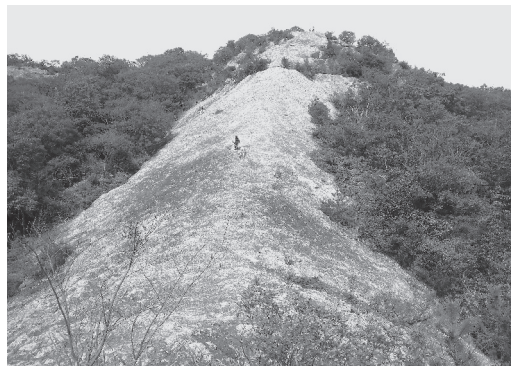
ウの飛来地だ。男池に突き当たり左折。右に行くと鴨池バス停があり、鴨池公園駐車場がある。車の場合はここに駐車できる。

緩やかな上りとなり、左手に「小野アルプス案内板」がある福岡峠の登山口に着く。峠より急な登りを5分ほどで南野山（117m）に着く。木が茂り展望は利かない。西コースはほかのコースに比べ利用者が少なく、岩山までは荒れている。

南野山から5分で宮山（148m）、ここも景色は見えない。いったん50mほど鞍部へ下り、岩山へと登り返す。山頂部を右に回り込むと岩場が現われ、景色が開ける。山頂東側に四等三角点（164m）がある。ここから鞍部へ下り、登り返すと西紅山（163m）。山頂にはパワースポットの夫婦岩があり、「岩に触れて力強いパワーを感じれば心もリフレッシュ！」の看板も。紅山へ向かう途中から岩尾根が見え、四つん這いで登る人や、お尻を着けて下る人が見える。紅山（184m）到着。南面に展望が開け、急傾斜の岩場が足元から切れ落ちている。本縦走の核心部、紅山からの下りだ。傾斜は上



が急で、下に行くほど緩やかになる。不安な人は右側の迂回コースから下りよう。立ったまま下れるが、心配なら四つん這いになるか、ロープで確保した方が安心だ。岩倉峠へ下り、林道を少し左へ行き、道標のある惣山^{そう}への上りに入る。小野アルプス最高峰の惣山（199m）は「小野富士」とも言われ、山頂部は広い。北に200mほど行くと展望デッキがあり、北側に



本縦走の核心部、紅山南面の岩尾根歩き

大展望が開ける。なだらかな道をアンテナ山(172m)まで行くとアンテナが立ち、目の前に総山が見える。急な上りで二等三角点の総山(168m)へ。総山は上りも下りも急だ。アザメ峠で峠の地蔵に出会い、車道を左へ行くと「小野アルプスへようこそ」の看板が立つ。

看板から右へ入り、1つ目のピークを越えてまた登ると四等三角点の安場山(156m)。さらに下って上り、図根点の標柱を過ぎると愛宕山(154m)。さらにNTTの電波塔のある前山(136m)へ。山頂は広場で、ベンチもあり見晴らしが良い。あと一山、と言

い聞かせ、急な下りを日光峠へ。さらに急な上りを登って最後のピーク高山(127m)に立つ。ここにはベンチと東屋がある。後は「ゆびか」に向かつて下るだけ。時間のある人は温泉に浸かって帰るのも良いだろう。「ゆびか」から市場駅までは15分ほどだ。

【コースタイム】 小野町駅(1時間) 福岡峠(5分) 南野山(5分) 宮山(15分) 岩山(25分) 西紅山(10分) 紅山(20分) 惣山(10分) アンテナ山(20分) 総山(15分) アザメ峠(30分) 安場山(15分) 愛宕山(10分) 前山(25分) 高山(15分) 白雲谷温泉ゆびか(15分) 市場駅

【入・下山口へのアクセス】 JR 小野町駅または市場駅。車の場合は「白雲谷温泉ゆびか」か「鴨池キヤンプ場」の駐車場を利用(いずれも無料)

【史跡】 皿池の西側には福岡古墳群の1号墳があり、岩倉入り口付近には岩倉2号墳がある。いずれも石室内に入ることができる。

【参考文献】 本コース記載の本は見当たらない。ネットでは、「小野市観光ナビ・小野アルプス」(小野市観光協会) <https://ono-navi.jp/spot/2100>

連載■ご当地アルプス登山案内 24 加西アルプス

「加西アルプス」は、兵庫県加西市にある善防山(251m)と笠松山(244m)をつなぐ、凝灰岩の岩稜帯の山域のことである。笠松山は加古川水系と法華寺谷川水系の分水嶺にもなっており、麓には古法華自然公園が広がる。また、良質の「長石」が産出されたことから公園内の古法華寺には白鳳時代の日本最古の古法華石仏や、断崖絶壁に彫られた達磨大師などいろいろな石仏を見ることができる。また、善防山山頂には南北朝時代に



法華口駅から見た加西アルプス。善防山(左)と笠松山

関西支部 上森文子

赤松範資が築いた山城があったとされ、石積みや土塁・石割も残されている(埋蔵文化財指定史跡「善防師城址」)。

加西アルプスには山城由来の名前が付いた5つの登山口(東櫓西回廊・本丸・烏帽子岩・大手門)があり、駐車場がある本丸登山口からの入山が人気だが、今回は起伏があり、アルプスの雰囲気を感じながら気持ちの良い岩稜歩きを楽しめる、東櫓登山口からのコースを紹介する。登山適期は、低山の岩稜帯で遮る木々も少ないことから、梅雨時期と真夏以外がお勧め。

【コースガイド】

法華口駅を出ると、正面にこれから登る加西アルプスの全貌が見渡せる。駅前の法華口三重塔を背中にしながら、国道372号へ向かう。国道に出ると右折して、西に進む。車に注意しながら国道を歩き、「善防交差点」で右折(北)する。交差点から入ると右側に加西つり池センター、左側に細い道路



があるが、この道路を入った所が東櫓登山口になる。プレートや目印があるので間違える心配はない。ウバメガシやツツジなどの雑木林の急登を、倒木に気を付けながら一気に登ると、元の東櫓に到着する。近くにはウマ岩展望台があり、視界が一気に広がる。展望台からはこの先、自分が歩くゴツゴツした岩稜の稜線を見ながら、展望の良い尾根歩きとなる。ここから高度を上げながら三角点のある山ノ上(元の南櫓)に到着する。



笠松山展望台から振り返り見た善防山

山の上からは一氣に下つて西回廊登山口からの道と合流、また一氣に登つて本丸登山口・烏帽子岩登山口からの道と合流し、善防山を目指す。登り切ると山頂に到着だ。山頂へは大手門登山口からの道と合流する。山頂は360度の景色が楽しめ、天氣の良い日は六甲山や妙見山、淡路島を見ることができ、東西南北に設置されているパネルで山座同定しながら山を見るのも楽しく、休憩ポイントとしてもお勧めする。

善防山からは岩稜の道を下るが正面にこれから目指す笠松山がよく見える。しばらくすると右に下山道のプレートが付いた分岐が現

われ、その先に吊り橋と鎖場を経由して笠松山を目指す直進ルート（北）と、馬ノ背から古法華池へ下り、東屋を経由して笠松山へ登り返す左折（西）ルートの分岐に出る。どちらのルートも周回コースをとれるが、今回は初心者に伴う場合にお勧めの直進ルートを選択する。高度感のある吊り橋を渡り、鎖場を越えると、正面にはこれから目指す笠松山とそれに続く岩の稜線が望め、右手ののどかな街並みの風景や、左手の重なり合う里山の風情を楽しみながら岩稜帯を歩き、山頂直下の鎖場を慎重に通過して笠松山山頂に到着する。山頂には360度見渡せる展望台があり、展望台の下に三角点がある。

山頂からの下山は東屋経由で古法華池に下る尾根ルートか、東屋の手前で左(南)に入り、涸れ沢沿いに下山するルートがあるが、時間と体力を勘案して選択すると良いだろう。どちらのルートも古法華池から流れる水路に沿った舗装道路に出るので左折(東)し、水路沿いに歩くと笠松山への吊り橋の下に出る。

切り通しの舗装道路を歩き、カブを過ぎると駐車場に出る。そ

のまゝ一本道を下っていくと車道に出る。車に注意しながら横断すると善防池と皿池という2つの大きな池に出る。この2つの池の間の道から田んぼに囲まれた道を直進（北東）すると、正面に北条鉄道の線路と木造の播磨下里駅の駅舎（登録有形文化財）が見え、ゴールとなる。播磨下里駅からも歩いた山並みが見え、気持ちの良い山行を振り返ることができる。

【コースタイム】 法華口駅(30分)
東櫓登山口(25分) 三角点山ノ上
(35分) 善防山(25分) 吊り橋(30分)
笠松山(10分) 沢道分岐(10分) 舗装
道路(50分) 播磨下里駅 合計3時
間5分

【交通アクセス】 JR加古川線加古川駅より「西脇市行き」に乗車、粟生駅^{あお}で北条鉄道「北条町行き」に乗り換えて法華口駅で下車。今回下山口にした播磨下里駅は隣駅。車の場合は善防公民館を利用する。

【参考文献・地図】 国土地理院2万5000分の1地形図「笠原」

加西市観光協会HP「かさい観光ナビ」 北播磨トレッキングガイドマップのぼってみよう北はりまー「加西アルプス（善防山・笠松山）」

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

紅葉の北八ヶ岳縦走

「あと15分で頂上ですよ！」岩肌

を飛び降りてきた少年の声が背中を押した。ごろごろの岩は、どこに置いても足は軽くは上がらない。たくさんの大人、子どもと行き交いながら15分登ると、本当に頂上に着いた。360度、展望のある北八ヶ岳・蓼科山(2531m)。

遮る物は何もない。本日も抜けるような青空だ。足元は岩だらけ。その1つに腰掛けた。わずかに吹く風が心地よい。さつき歩いてきた北横岳が目の前にでんと構えている。今日は10月2日、日曜日。台風一過が1週間遅れで来たかのよう

な好天だ。蓼科山はいつごろの噴火でできたのだろうか、遠い過去が今日の歴史をつくっている。

ここまでの道はバラエティに富んでいた。池、苔、ササ、キノコ

あり、そして溶岩石、急登は辛かった。リーダーは先を行き、振り返っては二番手の私の様子を伺う。私は自分に問う、大丈夫？

目にする景色はいつも新鮮だ。まるで初めて来たかのように、初めて見たかのように。あの山は何？ そっちはどこ？ いかん、いかん、自分で地図を見て確認するよう促される。そうせねば、といつも思う。しばらくすると、また聞いてしまう。こっちに見えるはどこ？ 私は学習できない。節度ある登山者のカケラもない。

初日の9月30日金曜日、あずさ1号が遅延するもなんとか茅野駅よりスタートできた。改修中のオーレン小屋、夏沢峠を経て、黒百合ヒュッテ泊。宿泊者16名。寝床は三角屋根の3階裏あたり、匍匐前進で階段を昇る。

夜中、外へ出た。星がこれでもかと言わんばかりに散り広がり輝

いていた。これらも遠い過去からの贈り物？

10月1日土曜日、中山から白駒池巡り。時間があるので池前の青苔荘で昼食にした。メニュー写真のキノコの大きさにつられて、キノコ汁430円を頼んだら、小さなお椀と善光寺の七味唐辛子缶が出てきた。いかん、いかん、写真と似ても似つかぬ、などがっかりしてはいけない、欲深さが透けて見える。キノコは美味だが、汁がぬるい。店の方針か沸点のせい

か？ いかん、いかん、山中で疑うは天候と道迷いとクマ。

茶臼山、縞枯山を越して宿泊する縞枯山荘にたどり着いた。このあたりは針葉樹林の多くが白く枯れた状況と、緑のままの状況とが帯状に層を成している。樹木の世



東天狗岳山頂での記念撮影

交代を繰り返しているという。かつては緑色を成していたであろう葉の形を残したまま枯れて真っ白くなっているのには少々恐いものがある。世代交代ってそういうもの？ 分からない。ランプの小屋は清潔で静か。夕食前に人間天日干しをした。日差しが強く、着ていた服一式を乾かした。翌朝はさすがに空気が冷たい。低木のササに霜が着き、小屋の周り一面が銀色に光って、きれいだった。

赤い葉の点在は確認するも、標題の紅葉にはまだ早かった。次週に色づくのか、今年はそのまま冬に突入か、分からない。

雨風なしの青天井、天候良し、景色良し、宿良し、御飯良し、仲間良し、嗚呼、楽しかった！ 3年歩いてなかったのも、もう足は動かない、歩けないと思っていたが、まだまだ大丈夫、歩けるんだよ、と思わされた今夏の山行だった。

皆さん、どうもありがとうございました。

(三井賢治)

科学委員会

信玄棒道を歩き、
石仏観察の研修山行

11月19日(土)、科学委員会の研修山行を開催。13名の委員と東京多摩支部からの3名と、計16名の参加となった。

小海線甲斐小泉駅に10時15分に集合、駅前でガイドをお願いした北杜市資料館の若き学芸員、大熊さんと合流。八ヶ岳をはじめ、鳳凰三山、北岳、甲斐駒ヶ岳、鋸岳など南アルプス北部の眺望が素晴らしい。さっそく名水百選の「三分一湧水」に向かう。水路・水流量のもめごとを防ぐために、均等に三



日本山岳会科学委員会
武田信玄公棒道研修山行
雑木に囲まれた棒道で記念撮影

分に分ける仕掛けは三角の敷石であつた。

小荒間番所跡を過ぎて間もなくすると、西国27番・如意輪観音座像が現われる。大熊ガイドの説明によれば「信玄棒道」とは、武田信玄が北信濃攻略用に最短の軍用道路として3本造ったと言い伝えられている。八ヶ岳西麓をほぼまっすぐなので棒道と呼ばれるが、江戸時代末期、この信玄棒道沿いに1丁(約109m)ごとに三十数基の観音像が安置されたこともあり、現在でも「上の棒道」の一部が残されている。棒道には主に5種類の石仏があるが、まず西国27番・如意輪観音座像が現われた。如意輪観音は手が6つ、右手で頬杖をついて思索しているスタイルだ。

舗装道路が終わり、砂利道になると二股となるが、いったん棒道を離れて名水百選「女取湧水」チャレンジコースを行く。分岐には5種類の石仏の2つ目のタイプの十一面観音立像がある。緩やかな登りで約25分、女取湧水に到着。女取湧水の謂は、色々と語られている女取川哀話からきているようだ。残念ながら水が湧き出している部分はフェンスで完全に囲まれてお

り、全く見ることができない。しかし、すぐ近くからかなりの量の水が流れ出している。

20分の下りは大半が防火帯で幅広になっており、まさにカラマツのプロムナードだ。再び棒道に合流したのは12時過ぎ。参加者は早朝に朝食をとっているの腹の虫が鳴き始める。坂東7番・聖観世音文字塔、坂東9番・千手観音座像、坂東10番・千手観音座像、坂東11番・聖観音立像が次々と現われる。カラマツや落葉広葉樹の中に立つ別荘地の中をまっすぐに進むと、やがて左手の小淵沢カントリークラブ沿いとなる。

12時40分に火の見櫓跡地に到着。正面に甲斐駒ヶ岳を見ながら参加者全員で昼食をとり、13時、棒道と分かれて緩やかな舗装道路を下り始める。足にきついのであるべく地面が土の側道を歩く。右手にある公民館を過ぎれば道の駅小淵沢まであと半分だ。道の駅小淵沢には日帰り入浴ができる「延命の湯」があるが、またの機会に訪ねよう。富士山の姿を左手に眺めながら歩く。14時15分、無事に小淵沢駅に到着。大熊ガイドと別れ、参加者と駅近くの食堂でビールとお

でん、つまみを食しながら約1時間、振り返りを行なった。大半の方は15時58分発のあずさ42号で帰宅した。

車中では甲斐駒ヶ岳に懸かるすばらしい晩秋の層積雲を眺めながら、歩いた信玄棒道と江戸時代に安置された観音像を思い返しているうちに睡魔に襲われてきた。新宿着18時04分。
(伊藤謙二)

緑爽会

緑爽会主催講演会の報告

緑爽会では、さる10月22日(土)午後、武蔵境のスカイルーム1で、講演会「関東地方を取り囲む峠を歩く」を開催した。講師の埼玉県立川の博物館研究交流部長・大久根茂氏から7つの峠について、パワーポイントを使い、峠や街道の風景、あるいは歴史的記念物の写真などを映しながら、個別の峠にまつわる歴史や民俗的な視点からのお話、あるいは地形的な特徴などをご説明いただいた。北は山王峠から、南は箱根峠の13の峠を準備いただいたが、時間の関係もあり、出席者から希望の峠を聞いて話す形となった。夏に埼玉支部で地元秩



大久根講師の講演に聞き入る参加者

父の峠を中心とした講演をされているが、また一味違う内容で、興味の湧く内容であった。

関東地方は山に取り囲まれてお

支部



だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

群馬支部

関東4支部合同懇談会を2年ぶりに開催

関東地方の東部から北部をブロックとする千葉・茨城・栃木・群馬の4支部は、11月26日(土)・27日

り、江戸(東京)に向かうには、どこからであれ峠を越えなければならぬ。その当時のままの峠もあれば、トンネルとなったり、別の自動車道ができた峠も多い。その時代時代の歴史的な事件などに想いを馳せるのもよい。創立120周年記念事業の山岳古道調査も始まっているなかで、参考になることも多かった。なお大久根氏は季刊『山の本』で、「峠の履歴書」を連載中であるが、過去に『秩父の峠』などの著書を出版されており、これらを併わせて読むこともお勧めしたい。

(荒井正人)

(田)群馬県高崎市で、2年ぶりとなる4支部合同懇談会を群馬支部の主催で開いた。

4支部は毎年持ち回りで合同懇談会を開催してきたが、2020年2月の茨城支部によるつくば市での開催以来、コロナ禍で見合わ

されてきた。21年4月には群馬支部主催で行なう予定だったが、新型コロナウイルスの感染の波にも重なり、延期となっていた。

初日の26日午後から、懇談会に先立って、同市内で「シカ・ヤマビル・マダニの話」と題した講演会が開かれた。講演会には4支部の会員と、地元的一般登山愛好者や自然保護関係者など40人ほどが集まり、群馬県林業試験場上席研究員で獣医の坂庭浩之講師の興味深い話に聞き入った。シカの生態や生息域の拡大による生態系や林業などに与える影響、そして、シカがキャリアとなって生息域を広げているヤマビルやマダニの状況が



懇親会で演奏するRinnさん

分かりやすく説明された。専門家の研究成果を踏まえた話は登山者にとっては実戦的でもあり、ディート30配合の虫よけスプレーによるヤマビル対策など、我々にできる具体策も明確に示してもらえた。夕刻には市内の宿泊場所でもあるホテルに会場を移して懇親会が開かれ、4支部の35人が参加した。開会挨拶、乾杯、各支部の活動報告などの後、群馬県を中心に活躍するアコーディオン奏者Rinnさんによる山の歌を中心としたミニコンサートもあり、和気あいあいとした中に華やかさもある懇談会となった。

翌27日は皆、前日の「懇親疲れ」も見せぬ元気で、朝から山行と観光に分かれて、群馬の晩秋の旅情を楽しんだ。

山行には日帰りも含め30人以上が参加し、高崎市の北西にそびえる榛名山を訪ね、古道調査の対象でもある榛名神社から榛名湖への道を歩いた。晴天にも恵まれ、群馬有数の名社で、最近パワースポットとしても知られる榛名神社からの穏やかな秋の古道歩きを楽しむことができた。湖畔では豚汁の振る舞いもあり、榛名の峰々や

榛名湖を眺めながらの贅沢なランチタイムを楽しんだ。

観光は上越新幹線の車窓からもよく見える丘陵上に立つ巨大な白衣観音など、高崎市内の名所や高崎名物のだるま生産地を6人で巡り、山行組とともに昼過ぎに無事解散となった。

「支部懇」の再開を契機に、地理的にも近接した4支部の交流、連携を図り、日本山岳会の活動を今まで以上に盛り上げていきたい。次回は来年11月、栃木支部の主催で行なわれる。

(群馬支部長 根井康雄)

富山支部

エベレストの写真展と講演会

この秋、富山支部は富山県立山カルデラ砂防博物館と共催で、エベレストの写真展(10月4日～12月18日)と講演会(11月3日)を、立山ケーブルカー乗り場に隣接する同博物館において開催した。

写真展で展示したパネルは、日本山岳会の「エベレスト登頂50周年記念フォーラム」プロジェクトが作成したものを本部から借用し

た。これらの写真は、小冊子『写真で振り返る日本人のエベレスト』(2021年4月、日本山岳会)として出版されており、1970年の日本人初登頂から今に至る、日本人によるエベレスト登山の変遷が一目で分かる。写真としても見応えがあるもので、ほかの支部でも活用されることをお勧めする。会場には、富山支部所蔵の、70年7月にヒラリー卿が夫人と立山を縦走したときの写真や、同年の日本のエベレスト登山隊と2019年に佐伯智彦氏が使用した TENT や酸素ボンベ、衣類なども展示したので、50年を隔てた登山装備

寄附金および助成金などの受入報告(11月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
新潟県山岳協会	40	越後支部主催 第5回糸魚川ジオパーク 子供登山教室共催負担金
佐野 忠則 会員	18	日本山岳会活動全般に 対する寄付
匿名希望 会員	18	日本山岳会活動全般に 対する寄付

の違いも実感できたのではないかと。講演会は、日本山岳会資料映像委員会委員長でもある同博物館学芸課長・飯田肇氏の司会で、神長幹雄氏と佐伯智彦氏が講演を行なった。神長氏の講演は、氏の共著『日本人とエベレスト』(2022年3月、山と溪谷社編)を凝縮した密度の濃いもので、日本人初という目標がなくなったエベレストに、その後の日本人がどのような意義を見出して挑んだのか、ヒマラヤにも大衆化の波が押し寄せる昨今、パイオニアワークの発露である登山が今後どこに向かうのか、大いに考えさせられるものがあつた。



エベレストの写真が展示された会場

また、『山と溪谷』の編集長を務め、自らも何冊かの著作を持つ神長氏の講演は、氏の豊富な知見と人脈を彷彿とさせるものであつた。

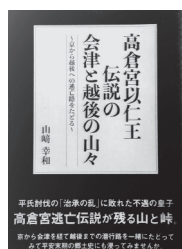
2019年5月に富山県人として初めてエベレストに登頂した立山ガイドの佐伯智彦氏は、往年の芦峠ガイド、佐伯平蔵の4代目である。母校の芦峠小学校がクムジュン・スクールと姉妹校だったので、子どものころからネパールを身近に感じていたという佐伯氏は、最初の高所登山では高山病で肺を患い登頂を断念、医者から2回目は無理だと言われながら高所順応の訓練などで万全を期し、香港チームの一員としてエベレスト登頂

を果たした。また、学校登山など富山の登山文化が衰退していく時世を憂い、子どもや中高年に山の魅力を知ってもらうことにも取り組んでおり、富山支部にとつても示唆ある講演であつた。お二人の講演が終わった後、神長氏に写真



高倉宮以仁王伝説の会津と越後の山々

山崎幸和著



2022年10月
新潟日報メディアネット
A5判 294頁
1800円+税

うっそうとしたスギ林の苔むした道を登ると尾根の端に五輪塔があり、高倉宮以仁王墳墓がある小倉嶺に着く。胴塚があり、その上に首塚が木漏れ日を浴びていた。こんな所に――。

展会場でギャラリートークをお願いし、講演内容の理解を深めた。今時、エベレストより百名山ではないかという懸念も頭をよぎったが、エベレストの魅力を再認識した企画であつた。

(富山支部長 鍛冶哲郎)

高倉宮以仁王は、平氏全盛期の平安末期、平氏打倒のため源頼政と追討の「治承の乱」を起こしたが発覚して敗死した、と史実に残っている人物であるという。その人物の墳墓が、なぜこの越後の辺境の地にあるのだろうか。

敗死したはずの高倉宮以仁王は生き延びられ、頼政の弟・頼行の小国一族を頼って、京から越後に逃亡したという「高倉宮逃亡伝説」で語り継がれてきたのではないかと。

著者は高校登山部時代、東蒲原地域での幕営時に、夜話で「山里に

伝わる実話」を聞き、社会人となつて会津の山行時でも同様の説話を聞いていたという。後年、日本山岳会創立100周年記念で発行した『新日本山岳誌』編纂で、下田・川内山城の山岳調査をした折、番屋山や銀次郎、銀太郎山の山岳名が、ある歴史上の人物と関係していることが分り強い関心を抱き、その人物に関わる伝説の調査を始めた、と回想している。

平成13年から「高倉宮御伝記」そのほかの記録を基に調査を始め、その成果を平成19年発行の越後支部誌『越後山岳』11号と、平成24年発行の12号に「高倉宮以仁王伝説の会津と越後の山々」と題し発表する。その後も地道に文献を調査し、現地調査を重ね、越後までどのような経路をたどったのか新たな考察を加え、本書を上梓したものである。

本書は、高倉宮伝説の起因となつた「治承の乱」の章をはじめ12章をもつて構成され、越後までの潜行路を記し、そこに「余談」と称して高倉宮に関連した山岳や伝承に加え、著者の登山体験談も紹介している。

会津・越後での伝承が、さも史

実のように語り継がれているのはなぜなのか、生き延びたとしたらどの経路で越後に着けたのか。監視の厳しい北陸道、東山道を避けるだろうが、それではどこを通つたのか、さらなる調査と考察を重ねた。

駿河まで船で渡航し、信濃から上野に出て、会津を経て越後入りした逃避行であつたのではないかと、の推論を立て、越後までの行動を日を追つて考察する。第2章から第9章までは高倉宮従者の日記や伝承調査を基に記述され、第10章から第12章までは、長岡小国地域から弥彦山塊の高倉宮に関わる伝承が詳細に記載され、興味深く読むことができる。

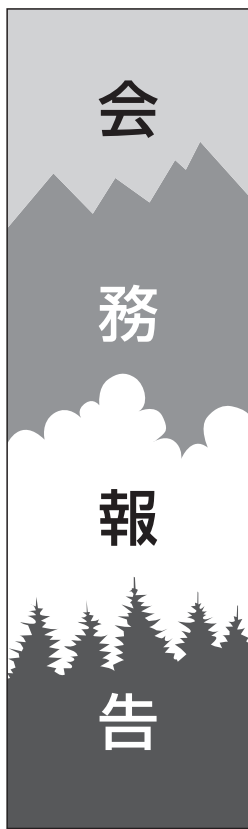
読み始めると時間を忘れてしまう。否が応でも脇には地図を置き、逃避行経路を見ながらその地を思い浮かべてしまう。それほど、あたかも自分が旅をしているような感覚になつてしまうほど、引き込まれてしまう。

逃避行記述もさることながら、各章に「余談」の項を設け、高倉宮に関する地域の地誌から山岳紹介・体験談を盛り込んだ本書は、単なる歴史書・伝承本とは違つた

感覚で読むことができ、著者の思いをにじませる。

「高倉山」、「御前ヶ岳」、「銀次郎山・銀太郎山」と、今までなに気なく読んでいた名称が高倉宮をはじめ、ご側妃の紅梅御前、高倉宮の従者に因んで山名が付いたという

謂（い）を知ると地域の歴史、伝承などにも興味を持つて山行するようにしたい、と思わせてくれる。会津、越後にはこうした山がたくさんあるので、山名の謂に思い馳せながら登っていただきたい、と願うものである。（遠藤家之進正和）



令和4年度第7回(11月度)理事会 議事録

日時 令和4年11月9日(水) 19時

00分

場所 集會室およびオンライン

(Zoom)

【出席者】古野会長、坂井・山本・

橋本各副会長、柏・萩原・

南久松各常務理事、松原・

松田・清水・飯田・久保田・

平川・川瀬・長島各理事、黒

川監事

【欠席者】佐野監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・支部連絡会議に関わる旅費等費用の負担について承認した。柏(賛成13 反対0)

2・晩餐会費用の本部経費からの負担ルールについて承認した。長島(賛成13 反対0)

【協議事項】

1・支部連絡会議の議題進行について協議し、承認した。(長島)

2・支部主催の山岳祭への補助について協議した。負担する方向で継続審議(坂井)

【報告事項】

1・正会員6名、準会員6名の入会承認報告があった。(古野)

2・寄附金5件の受入れ報告があった。(南久松)

3・創立120周年記念寄附の振込状況の経過報告があった。(柏)

4・ヒマラヤキャンプ経過報告があった。(柏)

5・事務局人事について報告があった(柏)

6・海外登山助成金計画2件の結果について報告があった。(坂井)

7・山岳祭と宿泊施設の調査がまとまり、ホームページに掲載されたと報告があった(松田)

8・晩餐会に関するコロナ感染予防対策について報告があった。(長島)

【その他】

1・「山」11月号発行について(節田)

ルーム日誌
10月

1日 スケッチクラブ
2日 山岳古道PT
7日 総務委員会
8日 フォトクラブ

9日	理事会 三水会
10日	YOUTH CLUB
11日	図書委員会 財務委員会
14日	アルピニズムクラブ
16日	つくも会 休山会 かつばの会
17日	総務委員会 山行委員会
18日	学生部 山遊会
18日	自然保護委員会 フォトクラブ
19日	アルピニズムクラブ
21日	会報編集委員会 総務委員会 資料映像委員会 YOUTH CLUB
22日	00会 平日クラブ 総務委員会
24日	みちのり山の会
25日	山の日事業委員会 二火会
26日	資料映像委員会
28日	青年部
29日	総務委員会 山岳古道PT
30日	総務委員会 アルピニズムクラブ
11月来室者	178名
物故	
鈴木恭一郎(5539)	22・11・9
山中光子(13022)	22・10・27
奥田孝(13452)	22・7・25

図書受入報告(2022年11月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
三宅泰	オボコンベ：あの日あのかの山	234p/19cm	金港堂出版部	2022	著者寄贈
工藤岳	日本の高山植物：どうやって生きているの? (光文社新書)	253p/18cm	光文社	2022	出版社寄贈
P.コニエッティ・関口英子(訳)	フォンターネ：山小屋の生活 (新潮クレスト・ブックス)	173p/19cm	新潮社	2022	出版社寄贈
JAC四国支部(編著)	時代をつくる：JAC四国支部と小島島水	60p/30cm	日本山岳会四国支部	2022	発行者寄贈
天野一郎	天空の里 高所集落を訪ねて：元気なお年寄りたち	179p/19cm	白山書房	2022	出版社寄贈
田中陽希	田中陽希日記：日本3百名山ひと筆書き	280p/21cm	平凡社	2022	出版社寄贈
田中陽希	それでも僕は歩き続ける	216p/19cm	平凡社	2022	出版社寄贈
高澤光雄	山旅句 随想集	223p/19cm	北海道出版企画センター	2022	著者寄贈
渡辺隆(編著)	山の履歴簿 山と人との関わり (第3巻) 大雪山・北海道北東部	479p/21cm	北海道出版企画センター	2019	著者寄贈
渡辺隆(編著)	山の履歴簿 山と人との関わり (第4巻) 北海道北部・増毛	477p/21cm	北海道出版企画センター	2022	著者寄贈
水越武	アイヌモシリ：オオカミが見た北海道	204p/24cm	北海道新聞社	2022	出版社寄贈
佐藤聡史(編)	山と画家の出会い 人生を変えた絶景：武井清・千葉潔・上田太郎・春原直人・丸山晚霞	96p/30cm	丸山晚霞記念館	2022	発行者寄贈
岩間正夫(編)	世界山岳百科事典	1019p/27cm	山と溪谷社	1971	荒井真二氏寄贈
D. MacDonald (ed.)	The American Alpine Journal 2022 (Vol.64)	336p/28cm	The American Alpine Club	2022	発行者寄贈

林 静男(14176) 22・10・13
青木 惇子(14949) 22・10・26
退会
大田慶子(11088) 福井

田邊稔雄(13973) 富山
前美智子(14599)
長尾 桓(14859) 東京多摩
遠藤 奨(15858)

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆いいとこ歩き遍路①徳島・高知

山行委員会

四国八十八ヶ所1200kmを春秋4回の区切り打ちで歩きます。歩きに適した遍路道を選びました。初回は徳島県(発心の道場)の1番札所霊山寺から高知県(修行の道

場)28番札所大日寺まで順打ちします。諸作法はお教えします。遍路用品は一番札所での購入も可。
日程 2月15日(水)〜2月19日(日)
4泊5日
集合 15日(土)JR徳島駅改札口8時。14日(火)夜行バスで到着

◆新規事務職員募集のお知らせ◆

2023年5月に迎える本会事務職員(図書室担当、司書資格所有者)の定年退職により、新たに1名の事務職員採用を4月に予定しております。日本山岳会の事務職員として会務に関わり積極的にサポートしていただき、登山を愛し、会員サービスができる人材を募集します。募集条

件等の詳細については、次月1月号の本会報に掲載いたします。この件に関するお問合せは事務局にいただければ、総務担当常務理事より返信いたします。問合せは事務局宛て、メールにてお願いします。なお、今後募集を始める際には専用アドレスを設定することも検討中です。

あるいは前日徳島泊
行程
15日 徳島⇨1番霊山寺⇨10番切幡寺⇨川島町(泊)

16日 11番藤井寺⇨12番焼山寺⇨13番大日寺⇨16番観音寺⇨国府町(泊)

17日 17番井戸寺⇨18番恩山寺⇨19番立江寺⇨21番太龍寺⇨22番平等寺⇨美波町(泊)

18日 23番薬王寺⇨日和佐駅⇨御蔵洞⇨24番最御崎寺⇨26番金剛頂寺(泊)

19日 新村不動⇨奈半利駅⇨唐浜駅⇨27番神峯寺⇨唐浜駅⇨野市駅⇨28番大日寺⇨野市駅(解散)

1日1〜6時間(やや健脚向き)

参加費2万円(通信費、写真代など)、1日約1万円(宿泊代はその都度精算、賽銭、納経、昼食代)、傷害保険は各自お掛けください。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。

定員 8名(先着順)

申込開始日 1月4日〜2月10日まで

数見 直 TEL 090 172044668

sanako@jac.or.jp

日本山岳会会報 山 931号

2022年(令和4年)12月20日発行

発行所 公益社団法人日本山岳会

〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 古野 淳

編集人 節田重節

Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆

●今号の「支部だより」にもあるように、11月下旬は「関東4支部合同懇談会」に行ってきました。講演会・懇親会の翌日、「榛名神社から榛名湖畔への古道を歩く」という山行プランが組まれていました。●私は4月下旬、鳴神山に登った翌日、あいにくの雨で登山から観光に変更、初めて榛名神社にお参りしたのでした。随神門をくぐって境内に入ると、参道には巨杉が天を摩し、奇岩怪石が出迎えてくれます。本殿は岩壁を穿って建て込まれており、正に神域にふさわしい雰囲気でした。近ごろ、宗教問題で騒がれていますが、地方の神社仏閣は人口減もあり、青息吐息です。古人の篤い信仰心を見習い、こういう所にこそ喜捨すべきではないでしょうか。(節田重節)